

KH48-H72



1200400260255

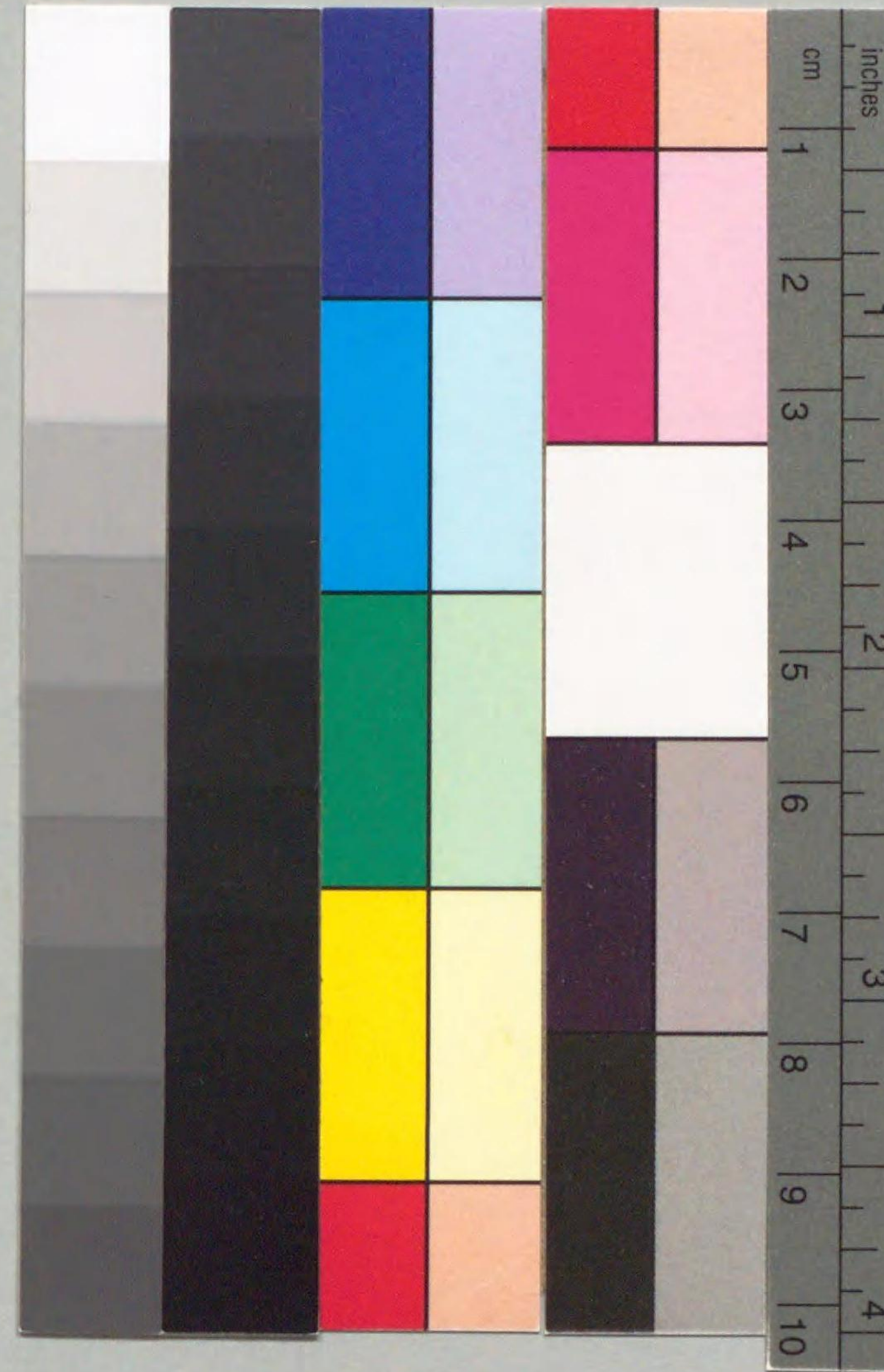


×

複写

神るけ渴

衛冬西安



安西冬衛

渴
ける
神

KH48-H72

目次

軍艦肋骨號遺聞	八—三
八面城の念力	一三—一六
怒る河	一七—一九
蟻走痒感	二〇—二四



I 種
W



1200400260255

オールドスの幻術

二五—三

汗の亡霊

三—四

幻

四—五

黒き城

四—五

三つの天幕

五—六

毒

五—六

渴ける神

軍艦肋骨號遺聞

軍艦肋骨號第三分隊長紋大尉の日記は、「肋骨」が獨乙郵船マリエステート號臨檢釋放の後、是より先マ號船長バッケンバルト氏の贈與に係る猫兒の姓名の質疑應答に始まる。當時「肋骨」は韃靼海峽の威力封鎖に從事中だった。以下は日記の抄録である。

……時ニ、マリエステートハ針路ヲ轉ジテ北北東ニ航シ去ラントス。余ハ遽ニ猫兒ノ姓名ヲ逸セルヲ知り、依テ信號兵ヲシテ問ハシメヌ。
問「猫兒ノ姓名ハ如何。」

答「曰ク「アルト・ハイデルベルヒ。」」

本艦「ハイデルベルヒトハ貴國名邑ノ名ニアラザルヤ。」

マ號「然リ。彼女ハ彼地ノ産ナル故。」

本艦「謝。貴嬢ノ安全ナル航海ヲ祈ル。」

マ號「御厚意ヲ謝ス。」

余ハ乃チ剃夫小野木總右衛門ニ、アルト・ハイデルベルヒノ飼育方ヲ命ジヌ。

幾許モナクシテマリエステート無シ。烟波浩蕩。

二

是より後アルト・ハイデルベルヒは、肋骨號唯一の女性として、平板一律なる封鎖の任務に多くの變化と色采とを與へてゐる。私は便宜日記を摘録して、その消息の一斑を窺はう。

五月二日。彼女は先づ日記の筆者のペン軸をワード・ルームから搬出して、副長室のデ

イワンに放置してきてゐる。恰も好し、當直を畢つて該ディワンに休養を投じた別中佐の、忽ち臀下を刺撃して大いにその剛愎を動揺させてゐる。(中佐別當といへば、人も知るシユミット・バンクの水雷夜襲戦に、装甲巡洋艦ベチョラ號の捕獲を單身敢行した豪膽一世に轟く當年の少佐である。)

同じく六日。彼女は食後の散策中誤つて錨鎖孔に失脚して、救援の急に赴いた三等木工服部丹次郎に瀕死の重傷を負はせてゐる。(人間の運命ほど測り知られないものはない。

——因ちなりに、彼女の失脚は彼女にラム酒を試ためさせた提督ミッドシップ・メエツの卵達の悪戯によるといふ。)

次いで十日。彼女は濛氣の霽間を前檣に登攀して四顧展望中、折柄ヘッドヤードに舞ひ下つた精悍な隼を一舉に仆してゐる。このインシデントは端なくも全艦のセンセイションを惹き起した。が、この日誌の筆者紋大尉は、幾分犬儒派の洗禮を受けてゐたものとみえて、事の顛末を記した後に、彼は一場の好譚を這般のモツプに酬いてゐる。

Cat's paw 猫時ニ Falcon ヲ壞サナイト誰ガ受合ヘヨウ

云云。

三

再び私は日誌を抄記する。

五月二十日。大型戎克一隻拿捕。搭載物乾草並ニ麥粉若干。猫六百羽。

私は哄笑した。

猫とは蓋し鶏の誤記であらう。大尉の冷眼にして尙この錯誤である。以て當時全艦員の脳髓を支配せる彼女の有力なる存在の左證と看るべきである。が、哄笑は聽てそれにかはる一派の哀愁を誘ふのである。五月も央なかといへば、本土は春も既に夙とく老いてゐる。併しこの北溟の旦暮を訪ふものは、ただ咫尺を鎖す濛氣の外にはなにもない。

斯くしてすべては次第に終焉に近づいてゆく。

五月二十七日。午後波間ニ一莖ノ蒲公英ノ漂ヲ見ル。春ハ既ニ北門ニ至レルニヤ。

大尉の日記は復以下を詳にしない。

**

越えて六月十日拂曉、「肋骨」は遽にその踪跡を襟裳崎沖に喪った。

當時浮説は觸雷といひ、又自爆というた。が、いづれにしても今では「肋骨」の名すらも人人の記憶には無いであらう。

それにしても彼女の最後はどうなったであらうか。彼女とはいふまでもなくアルト・ハイデルベルヒである。

八面城の念力

念力ほど世に恐ろしいものが又とあるだらうか。

當時私はラシッド財團對支文化事業夏期診療班に随つて、東蒙地方を巡回診療の事に従つてゐた。

かへりみれば北京出發以來烈しい沙漠の輻射熱と險しい排外的な空氣の中にあつて遂行してきた一行の使命は、實際豫想以上の困難を伴つた。われわれは終始無理解な出先官憲の故なく擬する銃口と、ともすれば暴徒に化する畏れのある土民の危険に暴露して、辛くも任務をつづけてきたのである。

盗難の如きは常時のことだった。

現にカチルボーラでは、重トラホームのために殆んど視力を失つてゐる蒙古人の老婆が

公然膿盤を掠取していった。又餘糧堡では、陰囊象皮病の一患者が巧に擬態を應用して、班長ヘディン教授の折靴を隠匿し去って一行を苦笑せしめたが如くである。

かういふ苦澁な日月も併し漸く終に近く、この日午後にはこの行の終端地四平街に出るといふ八面城に於ける日程の最後の日、診療所は午前中に閉鎖して、一行の行李は大車に搭載既に車站に向けて發送を了つたあとのことだつた。私は開車までの時間を利用して、業餘に私の研究してゐる「支那人の容貌」のコレクションをとるために、單身商埠地に赴いた。

すると城北の老爺廟に、仰天午睡に落ちてゐる一人の壯士に遭遇した。

この漢の面魂こそ世にも奇怪を極めてゐた。人間の容貌の眼目である「面目」といふ文字、ぬきさしならぬこの二字から、重大な「目」の一字を抜きとつたとしても譬へようか、眼窩の痕跡さへとどめない、ただみるそれは無埒な肉塊だつた。

私は左顧右眄した。蝟集してくる群集の妨害を恐れたのである。

幸あたりには人影もない。

天與ともいふべき究竟なこの機會。私は猶豫なくスケッチをとることにした。それにしても

(この漢を現世によびさまさせる唯一の術は、臓器療法の他はあるまい。……)

私は呆然と、胎生學上有り得べからざる妖怪の前に、空しく手を拱くのほかはなかつた。と、私の眼球が、この時急速に乾いてゆくことを自覺した。

強直が私の石灰質を奔つた。

(彼は儂の眼球を欲してゐる！)

果然、私の内語が、暗示となつて眠つてゐるこの漢の想念を喚起したのである。

咄嗟に私は身を挺して逃れようと試みた。が時既に彼の一念は、かへさうとする私の踵に、かへさすまじと吸ひついた。

私は渾身の力を盡して、併しじりじりと踵をかへしはじめた。

念力と死力の相争ふ輸贏。

.....

一進一退する彼我の阿吽は、しばし澄みきはまつて、ここにとどまるかとみえた。 Ma-
gdeburg hemispheres ——それも東の間、みるみる私の死力は彼の念力の前に蕩盡してい
った。

遂に虚脱の刹那。

同時に、私は前後不覺に陥った。……

**

夜に入つて私は捜索隊に收容されて、辛くも失明を脱れた。併し私の衣服は寸断されて、
満身に打撲傷を負うてゐた。

怒る河

一九二*年七月の央、庫倫—寧夏間の^{ゼオデティックライン}最短線^{ゼオデティックライン}を踏査中、會綏遠地方を襲ふた前後
六晝夜に亘る激甚な旋風のために計器その他一切の携行品を破壊し盡されてその歸趨を失
うた蒙藏互恵鐵路建設隊の一行は、辛うじて生存中の残員を收容して、地平線の誕縦に空
しく救援隊の出現を待ち望んでゐた。當時彼等の困憊はその極に達してゐて、恐らく救援
隊よりも先に到着するであらう彼等の最期——死を待つばかりだった。

見渡す限曹達を噴いた熱沙を焦して、蒙古の太陽は灼け爛れてゐた。鐵製のコップはそ
の内部にひいたエナメルに、命の日數^{ひかず}を刻んだ滓^{つひ}の目をのこして、鹽生植物の群落に擲
たれてゐた。彼等の屬してゐる會社の、「翅^{あは}ある車輪」の紋章をもつた鐵道材料も、その
翅^{あは}の象^{あは}すなんらの奇蹟をも齎^{あは}すことなしに、なかば沙に埋れてゐた。凡ての物資が盡き竭
くして、既に百有餘時間の経過が咫尺の風物に慘として物語られてゐた。幾度か虚しく圖

かれた幻の湖に口をひきつらせながら、彼等は斷末魔の叫を烈しい渴きに絞められて、七
顛八倒の苦悶のうちに相次いで昏倒していった。陥ち凹んだ眼窩の中に、これが最後の一
人の最後の潤である瞳孔が、この炎熱の地獄を見さだめた次の刹那には又焦げ上った。つ
いで苦悶のためにわれとわが手で引裂いて、今は麻の纖維を纏ふばかりの毛骨が、沈黙の
大幕に呪咀の文字を書き綴った。そのあとには喰屍鬼の舐る唇の音かとも思はれる一陣の
熱風が、時にこの恐ろしい死の書を閲するのみであった。……

**

消息を絶った一行の遭難の顛末が、救援隊の手によつて詳にされたのは、月を踰えて後
のことだった。彼等を收容して歸還の行程についた我々は、その遺骨を駝載して庫倫への
行、順路、札喀河の激湍を渡渉した。この激湍はここに怒を發するため、彼等の鬼をとど
めた積裏に忽焉として現はれて、須臾にして又消えてゆく蒙古特有の河の一つである。

それにしても彼等の長い苦みに較べて、これは又なんと短い怒であらう。
人人は四邊を憚らず慟哭した。併しこの悲みの和唱も、轟く水勢の響に忽ち搔消されて
しまふのであった。

……
先驅の駝隊は既に渡渉を了つて、行く行く彼岸に土塵を捲き起してゐた。
目をあげて、遅れじと私は駱駝を急がせた。

蟻走痒感

地球上のあらゆる王立圖書館に備へられてゐる凡そ精密を極めた地圖の、そのいづれにも記載されてゐない「蟻走痒感」といふ府まちが、極央亞細亞の地下に埋藏されてゐる。

一九* *年、蜃博士の率いる華氏財團邊疆辨理公司鐵路建設局臨時調査部隊が、道を天山北路にとり、大戦前ひとたび白耳義シンジゲートに依つて規畫された中央亞細亞横斷鐵道豫定線（海蘭鐵路を露領トルキスタン線に接続するもの）再調査のため、伊犁を中心に、主として伊犁九域並びにその背後地の物資集散状況を蒐集中、偶通譯の事に従つた回教纏頭から、驚くべきこの死都ネクロポリスの秘密が漏らされたのである。

當時博士は秘密の漏洩を極力避くるとともに、綏定道尹公署に調査本部を移駐して該纏頭を督勵、這般來蟻走痒感府の遺跡を鋭意發掘中であり、その真相公表には尙多大の時日

を要するものであるが、この間逸早くも迪化無電臺の新世界發見の報道に始まつて、英ラグビー局の傍受、その中繼による列強無電網全機能の活動、資本主義百般通信機關の總動員、汎地球考古學會の緊急創立、西域護路軍戒嚴司令部の編成、麾下保安第一第三旅の出發、全世界有機物をあげての飛耳張目等、底止するところを知らない一大衝動の波及は、今や蟻走痒感府發見の事實を天下公然の秘密としたのである。従つて豫て余が博士から聽取した新世界事情の斷片を、ここに録載することも、最早當を失する所置でないと思ふ。但この記録は全然プライベートな性質のものであつて、他日真相公表の曉に多く補正を須たなければならぬことを、姑く附言して置きたい。

以下が事情の斷片である。

**

蟻走痒感府の推定位置は、伊犁河系を中心とする概算八十乃至八十三度、四十三乃至四十五度の經緯を劃する冲積世土壤の内部である。

所在の人民は悉く青斑を帯びた白色陶質の皮膚を有つてゐる。

木火土金水、そのいづれに對しても彼等は *immortal* である。

只蟻酸 *formic acid* には全然抗力を有しなす。

即ち酸の蝕は、彼等の死に他ならない。

蟻に關する夥しいタブー。

蟻と組織を一にするその社會制度。

即ち彼等の統治者——汗は *female* である。

汗は青斑の多寡、そのいづれかの最なるものを交替に制めてゐる。

多斑汗の記録は恒河砂。

寡斑汗のそれは詳でない。

汗の在位年限は四年。

死に因る禪位は、固よりこの限りではなし。……

口授し來つて博士は卒に口を緘して、復その餘を語ること避けられた。
瞑想多時。

敢て私は一問を試みた。

「他種族との交通の有無は……」

「無いものやうである。」

尋で一脈の喜色が博士の口邊に漂ふた。

先生の唇頭はおのづから解けた。

——凡そ水の浸潤にも比すべき沿濡たる支那文明の影響は、ここにも恐るべき異例を示してゐる。現に綏定城を距る北東約一支里の地點にある無名の乾溝から出土した蟻走痒感人の遺片には、明かに漢代の紋様を黥した青斑を指摘し得るのである。この偉大な事蹟は、誇るべき文化をもつ吾人光輝ある漢民族の同慶に堪へないところである。

因に蟻走痒感とは、彼等の死に對する強迫觀念に基いて假に自分の命じた呼稱であつて、概ねユーイットを、西歐人呼んで生肉ユスキモを食ふ人となす類である。云云。

**

博士の真相公表には尙多大の時日を要することは、既に述べた如くである。依つてこの記録の不備は、それを補正の曉に待つ傍、私は浩瀚な支那の文献を涉獵して、有巢氏ウカシ以來五千載の史乘に蟻蟻蚍蜉の災を討ね、蟻走痒感府湮滅の年代を略推測したいと思つてゐる。

オールドスの幻術

—

ひとり沙漠の圖くさまさまな假象に止まらず、沙漠は沙漠それ自體不可思議な幻術をもつてゐる。この幻術の擒になつて、これまでに命を失つた人がどの位あるだらう。さういふ私自身も沙漠たぐみの工に憑かれて、すんでのことにも一命を殞すところだつたのだ。併し又奇しくも工の手に誘はれて危い命を完うしたとも云へるのだ。

そのために私は、一人の友を犠牲にしたのである。

友の犠牲で私は救はれたのだ。

犠牲——この言葉は面纱をもつてゐる。

私は面紗を引剥がさう。
私は友を殺したのだ！

二

當時、私はマルシャン少佐を首班とする温帯沙漠地質調査隊に加はつて、主としてオールドス地方の踏査に従つてゐた。私の屬してゐた第一班は、東經百八度十分、北緯三十八度五十分の地點に發見した泡沸泉の研究を、南東約一キロを隔てて幕營してゐた友の第二班は、黄河河系の湮滅した河床の發掘を、共にそれぞれ續けてゐた。

ただみる礫砂の起伏と、紅柳の群落の他には視野を遮るものもない漠北の、既に數旬に垂とする茫々たる生活は、覆ふべからざる倦怠の色を一行の上に漂はせてゐた。加之、隊員を冒す原因不明の風土病は、時に漸く猖獗の徴をみせてゐた。前驅症狀なき發赤。それに伴ふ熾烈なる灼熱感。一週日に亘る夢遊状態と全身の紅暈。ついで襲ふ脳症と心臓麻痺が、人人の最後だつた。

罹病者は續出した。

前後して斃れた。

オールドス紅斑病！最早それは救急箱の及ぶところではなかつた。

この虚を衝いて襲うたのが大旋風だつた。それは四月九日の午後から、翌十日の拂曉にかけて、一切を根柢から顛し去つたのである。

三

明くれば九日。

短波長の無電は、班の前進根據地——包頭の調査本部と、頻に紅斑病に関する處置の照合を重ねてゐた。

遂に正午調査打切、全隊引上の命が下つた。

風は同時に吹き初めた。

塵旋風は光りながら現はれて又消えた。それは克蘭ッの「旋風」のやうな快いリズム

をもつて、寧ろ一行を勇躍させたのである。

一晝夜の後に約されてゐる解放！

交互にハバサックを警め乍ら、この豫想に胸を躍らせるとき、そこには紅斑病に對する恐怖も消えていったのである。併しこの一時の勇躍こそ、恐ろしい死の前奏曲だったので。果してわれわれが幕舎を解體して無限軌道自動車に積載を開始する頃から、吹き募る疾風は狂沙を捲いて、瞬時に咫尺を辨ぜぬ天地を現出した。

われわれはその前夜、紅斑病に斃れた隊員を沙丘の陰に焼いたのである。刈り集めた紅柳の褥にガソリンを撒いて僚友達の屍に火を放った邊境のすさまじい一夜の記憶は、未だわれわれの脳底に生々しい。月は動ずんだ暈を被いで天心に近く駐つてゐた。それは來るべき風を豫め告げてゐたのである。併しかうまで神速に一行を襲はうとは、誰が期し得よう。

既にして漠々たる沙塵は、ハバロックの下に固めた防沙眼鏡を侵して、忽ち^{ワームキャスト}蚯蚓糞を堆んで鼻目を閉塞した。

過ぐる大戦の終末期に嘗めた、メッシーヌ^{ウイット}シャート高地線奪回の惡闘——爆薬の穿つブロックの噴水に、一再ならず浴した私の體驗も、この大自然の暴威の前には、

今は何等の用をもなさなかつた。

隨所に奔騰する土塵。轟々たる砂礫の怒濤。その真只中に、私は十方に廻轉しながら、叱咤とも悲鳴とも即かない叫喚の斷續を耳にした。次の瞬間、盲目的に登攀の手を掛けた無限軌道車の必死に投じたヘッドライトの溷濁した光芒は、同じ瞬間、足場を撈がれた私を掴んで大地へ投げつけた。刹那、天柱が私の意識を劈いた。

四

どの位の時間と経過がそこにあつたか、私は私の意識を臙氣にとり戻した。その時既に私は旋風と前後して私を犯した紅斑病第二期の症状を彷徨してゐたのである。

……私の潜伏してゐるのは、死の交通壕だつた。

曳火弾は炸裂して、前後に土砂をあげてゐた。

重機關銃の陰慘な閃光は、マスタード瓦斯彈の放散する煙幕のなかに、緑の腫を糜爛さ

せてゐた。

私は前進の行動を待つてゐた。と、みるまに火焰と劇薬の跳梁するフロントラインは私を放棄して徐々後退……團々たる光團に……聽てそれは落日に集約されて、一帯、縦横に鐵條網を纏いた黒蛇々たるサポートラインを現出した。

砲火は既に沈黙した。

日は今沈むのだ。

私は尙も潜伏を續けてゐた。すると前面の鞍部から鐵甲に銃劍を閃かした影像が不意に現れた。

——獨乙兵だ！

私は探った。武器は一挺の手斧の他には何も無い。

突然、彼は匍匐した。私を認知したのだらうか。さうだ。膝行して我に迫ってくるではないか。

彼我の距離はみるみる短縮した。

呼吸をひいた。

猛然、私は地を蹴った。(機勢をつけた手斧を真向に。……)

五

是より先、一行の急を無電で接受した調査本部の救援隊は、一部、事件の直後現場に着して、友の屍體と瀕死の私を無限軌道車の殘骸のなかに發見した。

私は救はれた。

當時、夢遊症状を彷徨してゐた私が、獨乙兵と幻覺して仆したのは、果然、第二班唯一生存者であつた他ならぬ友だつたのだ。私の一撃は深く頸動脈を斷つて、不圖も友を死に到らしめた。而も私の鎖骨上窩に加へられた友の刃は、幸か不幸か私にとっては致命傷とならなかつたばかりではなく、却つて瀉血療法となつて、偶然恐ろしい紅斑病の魔の手から私を濟ふ唯一の手段となつたのである。

北京の協和醫院は、曩に恩人を害した一人の背徳者に、當時、懇篤な予後の休養を施してゐる。

背徳者——それが自分であることはいふまでもない。

繻帯は除かれて、傷は最早癒着した。

併し私の肉體の亡びない限り、永遠に拭ふことの出来ない創痕は、私にとっては牢獄よりも苛酷な刑罰である。そのためか、創口を襲ふ不斷の激痛は、執拗に私の心身を苛責する。剩へ、窓外に漲る暮春の靈天は、ともすれば、記憶のなかのオルドスの沙漠を誘うて私の咽喉を梗塞する。しばしば私は呼吸困難に陥る。……

汗の亡靈

汗號喪失事件の梗概 一九〇三年九月四日、波斯ブシールから上海へ向けて鴉片を積載航行中の英船汗號 S. S. CHAM が、東支那海上で喪失した事件がある。當時同方面には中心示度六百九十ミリ内外のタイフーンが南方洋上から北進中であり、附近航行中の船舶はいづれも遭難したものであるが、それらは幾許もなく救助或は漂流中の殘留物の收容等によつて事情を詳にされた中に、ひゞり「汗」のみはあらゆる搜索照合の甲斐もなく、最後にロイド検定員の審議によつて覆没と判定され、遂にその船籍を永遠にこの地球上から消したのである。

尙一説には大破漂流中兇惡なる福建海賊の襲撃に遭うて、船貨諸共掠奪されたとも言はれてゐるが、既に事件發生後二十有餘年を経過した今日、その眞否は杳として遽に知るべくもない。

私は「汗」の亡霊を覗いたのである。ために危く死の蹄に係つて、一命を殞すところだつた。

記憶のよい方は御存知であらう。一九〇三年九月、三都澳の東北海上でその踪跡を喪つた汗號の事件を。

當時私は幼稚園に通つてゐる六歳の小兒だつた。併し生來 occultism に異常な好奇心をもつてゐた私は、子供ながらに事件の醸す周囲の動搖を綜合して、ひとり怪奇な想像をめぐらしてゐたのである。

その後私は成長して、妙な運命で支那に渡つてきた。そのことが一層私の occultism を煽つたことは言ふまでもない。併し私の住まつた大連といふ市は、凡そ面白からぬ土地だつた。私は不知不識の裡に愚な土地の空地に泥んで、いつとはなしに汗號の事件を忘れるともなく忘れてしまつてゐた。

會、過ぐる年の夏も終に近く、遽に私は機會を得て、平素私の餘暇に蒐集してゐる蝶類の採集旅行を臺灣へ企てた。

大連から臺灣へは 通常、大連⇨神戸線の定期船で門司に出て、そこで神戸⇨基隆線に轉乗するのである。が、私は特に天津⇨打狗線の「兩廣」といふ船を選ぶことにした。前者が三角形の他の二邊を辿るものとすれば、後者はその底邊を行くわけである。にも拘らず後者の所要日数は、前者のそれに倍するのである。そのことが私を牽きつけた。のみならず福建海賊の本據、兼て Good Typhoon Anchorage として有名な福州へ寄港するといふのである。

福州——それは端なくも往年の汗號喪失事件を、私の記憶の中に新にした。場合によつては前途を棄てて福州に淹留してもいふ。

私は出發の前夜 グラッドストーンへ、ダンカンの、「熱帯地方に於ける美しい蝶類とその蒐集法」、ハドソンの「臺灣の蝶類」、齋藤氏日本蝶類圖説」、採集用具、地圖、藥品等の類を蜂窩狀に詰め乍ら、早くも思を想像の福州の蜂窩狀の街衢に迎らせてゐた。……

季節にも拘はらず海は凩いでゐた。

明日は未明に福州へ到着するといふ恰も九月四日の日も既に西に春いて、卷雲を刷いた一望芒原を思はせる東の海境には、早くも夕月が昇つてゐた。

晚餐の後私はポート・デッキに臥椅子を運ばせて、非直の士官達と汗號の一夕話に耽つた。

大連解纜以來、終始ログラインの牽いてゐる「アイサーヌウキーン 凧」は、後檣のヤードの間に昨夜よりも一段と低く、臆て今宵も牙え勝つた。それはわれわれが遠く南下してきたことを物語つてゐた。

夜坐を撤して私がベースにひきとつたのは、かれこれ午前零時を過ぎてゐたらうか。

私は暫微睡んだ。併し蒸暑い船室の寝苦しさに堪へかねて、再び私はブープ・デッキに來て孤り涼を納れてゐた。

月は横雲に遮られて海は冥かつた。只遠い洋上の嵐の名残である黒いうねりの上には、夜光虫の燐光が明滅してゐるばかりだった。

思へば「汗」の遭難したのは二十八年前の今夜、期せずして場所もこの近海である。森

漫たる水に對つて私は「汗」を憶ひ、同じ運命の手に誘はれて行方を失つた軍艦敵傍や練習船月島丸の不幸な人人の身の上に茫々たる想を寄せてゐた。

どれ程の時間が過ぎたであらうか。

遽に私は身の周りの露けさに驚いて我に返つた。氣がつくと「兩廣」を罩めて咫尺を鎖す濛氣である。

私は戦慄を覺えて立上つた。

次の瞬間、私はスターン・レールに縋つて、その場に立竦んだ。何氣なく目をやつた目前の二十碼と隔てぬ後方から、濛氣を穿つて一隻の汽船が正尾追蹤してくるのだ。

それは恐ろしい船の相だった。煙筒も檣も盡く無慚に撈ぎ奪はれた甲板は、見渡す限算を亂した死屍に覆はれてゐた。而も死屍を枕に辮髪を頭顱に巻きつけた夥しい匪賊が、大煙を吸飲してゐるのである。渠等は等しく胸に兵と染め出した南京木綿を一着して、直前に殺戮を恣にした血醒い刃を横へてゐた。

——汗だ！

併し私のこの叫も嘔れて聲にはならなかつた。と同時に、恐ろしい船の相はみるみる濛氣を捲いて視界の外に消え失せた。

蒼白に化した私が辛くも船橋に辿りついて 前後の事情を懇へたとき、當直の一等運轉士は、言下にそれは幻覺でせうと一笑に附し去った。現に「兩廣」は霧鐘も打たなかつたし、別に速力もおとさなかつたといふのである。

言ふが如くそれは一場の幻覺に過ぎなかつただらうか。それにしても炳に「兵」とまでこの眼で私の認めた事實は、いづれにしても一つの手懸だ。

この上は屑く前途を抛つて、然るべく探索の手段を講じよう。福州淹留の肚を決めて、私は蹣跚き乍ら船室に引返した。

三

翌未明私は馬尾の碼頭に上陸して、グラッドストーンを船會社に託した後、更に閩江を溯つて單身福州の城内を軒別に、それとなく探索の手をすすめた。すると午後になって、黒籍區の一隅に「丘陸八」といふ招牌を挑げた古物商に逢着した。咄嗟に私の頭に閃

いたのは、前夜私の親た兵の文字である。丘八は兵だ。これは支那で使はれてゐるモノグラムである。陸は數字の六。兵の六號。「兵」匪の一味ではないだらうか。

意を決して私は剝啄した。

響に應じて現はれたのは、一眼の眇した悪相の壯士だった。

私は顧客を装つて店内を物色した。すると片隅に、一半の欠損した眞鍮の船名板があるではないか。而も青銅色に腐蝕したその表面には、臙氣ながら CHAM といふ文字が讀まれるのだ。私は躍る胸を抑へて、尙も仔細に點檢した。Cの前には更に蛇行狀の凸彫が纒に認められた。私はそれを ^{スチーム・シッフ} の S と假に判讀した。が、それにしては S と C との間隔が無い。試に綴ってみると、それは

……SCHAM

であつた

……S. CHAM

とは思はれぬ。

SCHAM——明にこれは獨乙語で、英船汗號の附屬品と看做すには疑念を挿挟む餘地が遺されてゐる。が、いづれにしてもこの船名板は手に入れて置かねばならぬ。

私は掛合った。

——五十弗！

法外な値だ。だが手に入れよう。なにも行懸だ。幸手元に用意のないこともない。が併し念の爲一應眞偽を確める必要がある。それに私がキャッシュを懐中してゐることをこの漢に知らせるのは、この際相手が相手で甚だ危険である。咄嗟に私は金員を調達して、後刻を約して船會社へ引返した。調べた。そんな船があるかないか。分らない。海事局へ廻った。萬國船名簿。果然、ブレイメン港置籍船に SCHAM といふ汽船がみつかった。而も前年東支那海上で難破してゐる事實が判明した。だがこの發見は私にとつて尠からぬ失望だった。

SCHAM の實體は、結局 SCHAM に過ぎないのか。

併し私は尙一縷の希望を棄てなかつた。

「丘陵八」に引返した。

私は急つてゐた。勢、私の質問は渠を促へて糺問の體になつてゐた。

(どんな徑路でこれを手に入れたか。)

(欠損した他の部分を手に入れる法があるか。ないか。)

「丘陵八」は明に不機嫌に、今は私を胡散と見て、最早一切をとりあはないのだ。

私は觀念した。

船名板に手をかけた。

——百弗！

渠は撥ね返した。

その不法！といふよりも剛岸不逞な渠の面魂は、この日早朝からの奔命と焦燥に慥れてゐる私を驅つて、前後の見境もなく赫怒に奔らせた。

私は面罵した。

併し渠はさういふ私を尻目に、突起した一眼の角膜部で私を見据ゑて執拗に黙しつづけるのだ。そして次の瞬間には——

逼迫した危機を本能的に私は自覺した。既に夜陰は四壁から迫つてゐた。剩へ私の後手には觀音開の鐵扉が自在に閉つてくるではないか。

矢庭に私は弗を擲んで、賊の面體に擲つた。

同じ刹那、ひるむ相手の虚を衝いて、間髪を容れぬ窮地を辛くも脱走した。搦み合ふ脚の墮す死の投蹄を無我夢中に踏み抜いて。……

幻

——わたくしは漢の元鼎中、北海の涯から貢してきた眩者の裔です。わたくしの血統は眩を善くします。ために歴朝の寵を專ほしいまにしてゐたのです。併し長い年月の間には次第に通力を失つて、私の代には遂に後宮を逐はれる羽目になりました。あまつさへ清末からの相繼ぐ兵亂と苛役に追ひたてられて、沙のなかを漂はねばならなくなつたのです。かうしてわたくしどもが黒い流木のやうなときなき日を送つてゐる。理ことわりがおわかりでせう。併し時が來れば、私の血のなかに眠つてゐる祖先のたましひがよびさまされるのです。ああ！そして今こそその時が來たのです。あなたの危い命をお救ひ出來たのがなによりの験しるしです。お禮を仰有つて下さるお志はもとよりですが、にもましてわたくしには験げんの現れたことがうれしいのです。それにしてもわたくしのつたない術がお役にたつたことはなによりでした。……

あるじ 主は羊の肉を火に炙つて、懇に私に饗應した。

私がある特殊の任務を帯びて熱洩路線接壤地を踏査中、老哈河の上流で道を失つた上、震顛と心搏急速のために倒れてゐるところを、偶甘草採集に漂泊してゐるこの一家に濟はれたのである。

私は過ぐる日の夕べ、この一家から最初に攝待された一碗の煮湯の熱さを忘れることが出來ない。咽喉を爛らせて過ぎた熱湯の一瀉下に、宿積の疲労は盡く溶解してゆくかと思はれた。それはこの世のものでない五官閉止の快い瞬間だつた。それから後の二日間の手厚い看護。次第に私は體力を回復した。そしてけふはこの一家に別れを告げて、前途を急ぐ出發の晨だつた。

羊の肉の一種特別な臭におひのなかに、私はトランス・ベルシャ風の變變たる妖氣を感じた。併しそれは決して悪い氣持のものではなかつた。それに主の老爺は、世にも柔和な眸まなこをうるませてゐた。言葉もなく私はすべてを肯うけがつた。

私たちが酌み交す奶酒ナイチユウ——別れの筵の上には、曉方の星が次第に色を失つていった。ついで沙の波濤ハハシを染めて日は瞳瞳と騰り初めた。

主は沙丘の頂まで私を見送つて、餞の鼻煙ビエイエンに添へて最後の注意を促した。

——あなたの影を踏んでどこまでも辿っていらつしやい。影があなたの踵の裏に這入る
比、泊ころほひノールが現れます。それがアクノールです。そこからは傾く日を追ふて、馬であと半日
の熟路です。日の沈む前に赤い山オランハタがあなたを迎へます。赤峯はその山陰です。折角お大切
に。万一迷が起きた節は、あなたの影をみつめて神をお念じなさい。神はあなたの行手にイ
つて、あなたを正しく導いて下さいます。その上は迷ふやうなこともありますまい。くれ
ぐれもこのことをお忘れないうちに。……
私は謝した。

主の所謂神なるものの實體が、視覚の残留——アフォーイメエジ残像であることは、固より明白
なことだった。併し一概にそれを無稽な迷信と卻けることは、私に出来なかつた。事實何
一つ目標とするものもない沙漠のなかでは、往々陥り勝な孤獨恐怖モノフォウビテからくる精神錯亂を濟
ふ、これも一つの手段だったからである。

かくして主客は手を分つた。そして薄暮、無事私は赤峯に到着した。

私はここで開魯以來の休養をとつた。併し疲労は全く醫えたとはいひ難かつた。依つて
今後の打合せもあり、旁醫師の診察を受けるために、フォードのフェートンで一先北京へ
直行した。

北京での診断の結果は、軽微な甲状腺腫とのことだった。

醫師は私に告げた。本症が熱河特別區域一帯の風土病——飲料水生食に因るバセドウ氏
病類似症であることを。

そして復物語つた。煮沸した飲料水を攝取することによつて、醫藥を要せず自ら快癒す
るものであることを。……

黒き城

一

すべては轉瞬のことだった。

——賊だ！

といふ従者の絶叫と同時に、護衛の官兵が反射的に長銃を投げ出した。……

そこまで私は覺えてゐる。刹那、モーゼル銃弾の風撃傷に、昏倒したのである。

意識を回復した時、私は既に馬背に緊縛されて、賊に拉致されてゆく途上だった。最早そこには部下の姿も、従者の影も見えなかつた。賊の隊伍は私を中心に半哩に垂たる單縦列で無数の沼澤を渡渉して、日没近く矮小な泥楊を周らした沓匂子（濡った原野の義）といふ部落に到着した。私はここで假に緊縛を解かれて、陋屋の一室に留置されたのである。

當時私は松花江開發工程公司の汽船藥殺號 S. S. JAKARTES に搭乘して、三姓||拉哈蘇々間の水道を測量中だった。その日——七月五日「藥殺」は高家屯を解纜。左岸の水路を午前中葦塘（蘆の生えた堤の義）まで下江した。一行はそこで假泊して、折角中食を攝つてゐたのである。この沿岸は一帶黑龍江省綏濱縣下の所謂河沿淤漲地で、見渡す限生葦の青紗を連ねてゐる。賊は突然この青紗を衝いて蜂起したのである。彼等の一隊は威嚇射撃で先づ「藥殺」を壓迫した。一方他の一隊は戎克を臆して、背後から「藥殺」に殺到した。屠殺、掠奪、破壊、遺棄——十分を出でない裡に、一隊は早くも私を拉して生葦の中を走行する。三十分の後には他の一隊が、私の部下従者「藥殺」の乗務員等を對岸に追放した。富克錦工程處宛の金員武器引渡要求書とともに。同時に彼等は、富克錦||拉哈蘇々間の電信線を破壊したとのことである。鄂來木に駐屯する官兵との連絡を斷つために。

かうして私は拉致されてきたのである。

三閱月の私の抑留生活が茲に始まつた。

蒸暑い晩だった。

仄暗い落花生油のランプの下に、聽て彼等の食事が開かれた。器皿の音、啾粥の聲、喧
紛たる口舌——整騒は密閉した室内の空氣を攪亂して、激烈な頭痛を催させた。一椀の包
米イヌが自分にも分たれたが、食慾は全然起つてこなかつた。そのうちに食事は漸く片付いた
が、續いて阿片の吸飲が始まつた。ために唯さへ溷濁した室内は燻る煙膏の惡臭と熱氣に
汚されて、窒息しさうな胸苦しさを覺えさせてきた。私は眩暈と嘔嘔に悩まされて、瞬く
毒の酒のほより徹宵まんぢりともしなかつた。

かくして、舊曆五月の短夜、併し私には長い長い抑留最初の一夜も、漸く白みそめてき
た。

明けて七月六日。この日賊は滄甸子を發足、終日又沮洳地を渡渉して、夕べに至つて珍
泡子（惡氣ある沼の義）といふ部落（いんま）に駐（とど）つた。

一體、前日来渡渉してきたこの地方は、部落の呼稱が表象してゐるやうに、松花江、敖
拉密河、蓮花泡の三つの水路に圍繞されてゐる沼澤地帯で、處々に密林を點綴した大濕原

はその廣袤を茫々黒龍松花二江の交會點まで展開させてゐるのである。そして又この密林
はその殆んどすべてが、亞細亞罌粟の秘密栽培地と、どんな地圖にも記載されてゐない
開墾者の部落を隠匿してゐるのである。賊は——毛裡（マオリ）的胡子（テフ）と呼ばれてゐるこれらの森林
馬賊はこの部落を目的に、密林から密林へ絶えず移動を續けるのであつた。それは討伐の
官兵から踪跡を晦ます一方、罌粟秘密栽培者から必要な物資を徵發するためであつた。

罌粟秘密栽培者と匪賊。この兩者は、相互扶助の關係に立つてゐる。即ち前者が後者に
必要な物資を提供するその代償として、後者は前者を保甲するのである。ところがこれは
後日判明したことであるが、ここに肝腎の官兵までがこの兩者と暗黙裡に結託してゐたら
しい事實である。實際そのためであつたのだが、討伐の手は容易に延びてこなかつた。

そのうちに私の健康は日に増し悪化していった。剩へ時恰も雨期に際會して、陰雨は連
日この地方を鎖してゐた。掩ひ下る濛雨と立昇る瘴氣は、困憊した心身を犯し、遂に私を
惡性の熱病の擒とした。病竈は私の膝關節を蝕み、屈伸の自由を奪ひ、更に進んで歩行を
さへ困難にした。

その以前から私の衰弱を怖れてゐた彼等は、頻に阿片の服用を奨めてゐたのである。阿

片は單に促快劑であるばかりでなく、醫療機關を持たない彼等にとっては實に萬病藥だつた。只自分としてはその中毒を怖れて、疼痛を忍び乍らも彼等の獎めを拒んできたのである。併し最後には患部の激痛に堪へかねて、無我夢中に煙土を嚙下した。觀面、それは神の効用を齎した。私は食つた。

惡魔はかうして私の肉體に浸潤しはじめたのである。

普通に中毒症狀の現はれるといはれてゐる三週日が、さうして経過した。

その前後から私は胃の上部に、鈍壓を自覺しはじめた。紛れもなくそれは、小亞細亞でアフキユムカラヒサルアフキユムカラヒサル黒き城トキシック・シンタムと謂はれてゐる恐ろしいモルフィンの中毒徵候だつた。惡魔の津液は蓄積して黒き城を構築する。ここにして人は最早その警いさめから逃れる術すべはない。

私は二重の警に、今は陥つた。

縦や賊の警を釋さるる時が來ても、黒き城の警を解き放たられる日は最早無いであらう。絶望の眼まなこに映る日差は、既に物悲しい秋の色を帯びてゐた。

公司との交渉も、その後武器引渡の問題で停頓してゐるらしかった。かかるうちにも光陰は慌しく遷つて、九月も早なかばになつてゐた。

囚はれた日からの穢れた輕衣を透して、昨今朝夕の冷氣が一段と身に泌みだした。

三

それは九月二十四日のことだつた。

賊は前日來行進を續けて、この日拂曉忘れもしない滬甸子の部落に入つてきた。見覺のある泥楊ネグランド。抑留の第一夜を過した陋屋。心なしか矚目のものみなに一脈の和氣が漂つてゐる。釋放の日が近いのではないだらうか。

意外、この豫感は臆て現實となつたのである。

到着後賊の頭目は私を引見して、今日正午釋放金と交換に私の授受が行はれる旨を告げた。

日は輝いてゐた。喜色は自ら溢れてゐた。賊の面上にも。咫尺の風物にも。そして又自分の胸奥にも。さうだ、一抹の暗翳を除いては……

正午近く、屋上にイつてゐた哨者が滑るやうに下りてきた。

公司からの使者が見えたのである。
丁だった。それは従者の丁だった。
八十二日振の再會である。
感極まつて、二人は聲なき慟哭の裡に相擁した。

私は救はれた。

而もあの恐ろしい黒き城の警をも釋される日が來たのである。

健康地に移るに随つて、さしも執拗を極めた病熱も霧散していった。それにつれて阿片中毒の症状も、自ら拂拭されてきたのである。何らの醫療をも施すことなしに。

奇蹟。

私はこの事實を神に歸するより他に解釋がつかなかった。

醫師も亦、満足に價する説明を私に示しては呉れなかった。

適南京駐在の國際聯盟保健部常設阿片中央委員會囑託哀教授は、豫て私と辱知の仲だった。旁私は今次の事件の詳報に兼ねて、黒龍江省綏濱縣下に於ける亞細亞罌粟秘密栽培の情況を教授に通報した。

教授からは幾許もなく懇篤な慰問の辭に添へて、一九一九年一月發行の審査誌^{エキザミナー}を供覽にと贈られた。

該誌には、英蘭^{イギリス・オランダ}東部沼澤地方に於ける阿片中毒の一異例に關する以下のやうな文献が載つてゐた。

ノールフォークの沼澤地に居住する人士は、阿片を熱病の最良劑として服用するも、之が爲毒も中毒に陥ることなく、疾病全癒せは又用ふることなしといふ。^{二五二五}

三つの天幕

月光の微妙な作用に支配されて、人は往々志を喪つて昏迷に陥ることがある。古來、衝突とか、戦争とか、ひいては革命といふやうな不吉な出来事は、すべて月光の微妙な作用によつて惹き起されるものである。

人事の銷亡は、ひとり神秘的な月のみこれを識る。

東支西部線フルフラ停車場の西方約二十軒の地點に、二つの天幕が十月五日の暮靄を罩めて、折柄炊爨の火の粉を揚げてゐた。この敵とも味方とも判別しない二つの天幕は、長大な沙丘を隔てて、お互の所在を認識することもなく、次第に夜陰に沈んでいった。この二つの天幕は、次の日反對の方向に遠ざかつてゆく各の意志をもつてゐた。

彼等は相互に素敵の任務を帯びた金黨蒙古兵と、東支護路軍の支那兵だったのだ。果然、彼等は宿敵だったのである。

併しこのことを識つてゐるものは、月のみであつた。が、月はこの時まだ地上には昇つてゐなかつた。

二つの天幕は、聽て蚤い眠に落ちていった。あとには監視の蒙古兵が只一人、豁達たる胡天の裾に垂れ下る赤い星を、悲しげに打見成つてゐるだけだった

夜はさして更けてはゐなかつた。當夜の月齡は二二、九。月出は十時二十九分だった。

地平は、併しこの時まだ昏かつた。

それから小半刻も過ぎただらうか。

尿意に促されて一人の蒙古兵が、幕舎を出て灌木の茂みに放尿をしはじめた。

月はこの時死人の唇を思はせる大漠の周縁を劈いて、険しいその牙で蒙古兵の背部を穿つた。

放尿につれて失はれてゆく體温に身震して、思はず彼は頭を廻らして月中を見た。

——厭な月だ。不吉なことがなければいい。

すると足下の灌木に微かな音がして、怪しい物影が趨つた。

それは跳テイヤトウ兎と呼ばれてゐる東部蒙古一帯の原野に棲む齧齒獣だった。
跳兎は躍り乍ら、沙丘の斜面を逸走していった。

蒙古兵は別に深い考もなく、逃げてゆくこのピグミーを追ひ初めた。そして難なく沙丘を越えてしまつたのである。それが平靜な状態であつたならば沙丘の頂に達した時、彼は反對の斜面に支那兵の天幕を俯瞰し得た筈である。が、如何せんそこには既に昏迷が起つてゐた。それ故彼は何らの不審をも起すことなしに一氣に沙丘を駆け下つて、そのまま天幕に潜つて臥て了つた。思ひもよらない敵の天幕に。……

肝腎の跳兎は、いつの間にか横に逸してゐたのである。

一方監視の蒙古兵は僚兵の怪訝な行動を呆然打見送つてゐたが、沙丘の背後にその姿が没すると同時に、愕然我に返つて僚兵を追跡しはじめた。

暫時の後渠は沙丘の絶巔にイつて、眼下に怪しい天幕の所在を發見した。

僚兵の影は既に消えてゐた。

渠は潜行していった。そして隙かにそれが敵の幕營であることを偵知して、急を全隊に懇へた。

時を遷さず行動が起された。

渠等は新月形に展開して敵前百米の地點まで前進した後、附近に散在する甘草採掘の漏斗孔を胸牆に、卒然銃火を幕舎に集中した。

阿鼻叫喚の旋風が忽ち奔騰した。

この奇襲に夢を逆扱さかじぎされた支那兵等は、敵の方向を見定める暇ひまもなく、心身分離テイヌエンボテイメントの状態で十方に盲射を注ぎ乍ら、蒙古兵の逆らす火の鞭の下に縦横に錯倒した。

敵のこの擾亂に乗じて、蒙古兵の銃火は倍々猖獗していった。

形勢はかくて急速に蒙古兵に有利に展開した。それは蒙古兵の豫め期してゐたところである。

渠等は展望した。死屍の掩蓋を築いて落潮のやうに沈黙していった敵の陣地を。次の瞬間渠等は胸牆を躍り出て、果敢な最後の突撃に移らうとした。

途端、一閃の紫電とともに沸騰した鐵湯が、前面の陣地から噴き出した。それは支那陣地唯一の残存兵である失踪蒙古兵の操作する機關銃だった。

この時の戦闘距離は僅々數十米を出でなかつた。況して沙明楚練分といふ例ためしもあることである。が、如何せん彼も我も今は昏迷と逆上に礙られて、お互が僚友であることを辨へることが出来なかつたのである。

月はこの時一段と苦^まえて最後の殺戮の上に、すさまじい刃を翳しゐた。

——呪咀だ！

——呪咀だ！

豫期しなかつた逆襲の大恐怖に、宛も嵐を畏れて谷底に蝟集する家畜のやうに、蒙古兵は一個所に密集した。その結果が全滅に陥つたことはいふまでもない。

今は只一人、失踪兵のみが逆る鐵火の上に悪魔の形相を沈着させてゐた。よくみると、併し彼の呼吸も既に跡絶えてゐた。……

月は一切の顛末、殄戮の仔細を見とどけた後、棺衣のやうな雲を被いで、徐^{おもむろ}に洞^{しほ}んできた。

億兆の沙の充ち填つ無限の世界へ、人人の呻吟は消えていった。

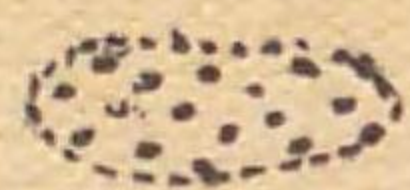
この修羅の場^{には}を覆ふ四面の暝——廣大無邊な天幕の下に、今こそ人人は再び妨げられることもない安らかな眠りに落ちていった。……

毒

……沼の存在は深刻で、豊富な意味があります。

三好達治君の手紙(昭和四年)

地圖の上で



かういふ記號のある場所を、あなた方は御覽になるでせう。これは沼澤地です。地球の有つてゐる醫し難い疾患です。凡ゆる惡の培養^{ブイヨン}基です。伊領ソマリランドの maremma

Marsh City と呼ばれてゐるレニングラード。これらの土地が今日までこの悪のために毒されてきた事實はそれのなによりの実證です。だが、この悪こそ、悪を抗ぐ唯一の適薬です。ある場合には寧ろこの悪は、毒を藥に變へる役目をさへ果すのです。所謂拉典の *Similia similibus curantur* です。

私は長い間支那の悪を眺めてきました。そして、その濟ふべからざる疾患の由つて來る所をこの沼澤地フイヨンに歸したのです。そのために私は前年、紅河の上流に卑濕の地を探つて、それとなく惡業の淵源を原たづねてきたのです。尤も當時は志を得ませんでした。剩へその途上勞開の附近では、土匪の襲ふところとなつて、耳殻を殺されるやうな目にさへ遭ひました。併し私は屈しませんでした。で、再び企を新にして、このたびは方向を青海省にとりました。Taschen Atlas に據ると、支那の最低地は、新疆省の魯克沁といふことになつてゐます。ここは海面下二三〇メートルです。が、御承知のやうに魯克沁は乾いたところですから。そこで私は青海省の有名な柴達木濕地 Tsaidam Swamp に目をつけたのです。恐らくこの大濕地の内部には、未だ地理學者の手に掛らない低濕地が隠匿されてゐるに相違ない

と想定したのです。私がそこへ足を踏み入れたのは一九二八年の六月の末のことでした。是より先、私は西寧府で一切の準備を調べ、道を蒙藏往來大道にとり、積石山脈を過つて、柴達木河河源の札遜地に出たのです。これより私は只一人従者も伴はずに柴達木河の流域を下つて行きました。そして七月の二十日には、東經九十六度の線を、北緯三十六度五五・六八分の點で西に越えました。柴達木河もこの附近までくると、水は無碍に放溢して、隨所に瀦溜を形づくり、伏流は自在に濼洄して、遽にそれと本來の河身を捕捉し難い渾沌たる状態になつてゐます。それに、この數日來現じてきた慘憺たる天地の面目は如何にも私の原ねる惡の淵源に近づいたことを思はせました。果然、越えて七月二十五日、私は東經九十五度四十一分、北緯三十七度八分の地點で、恐らく世界の最低地ではないかと思はれる沼澤を秘めた甌穴狀の濕地に逢者したのです。かういふ黯黹たる土地にも人は、由來紅色陰癡性猖獗力を賦與された怖るべき支那人は、逞しい蕃殖の根を蔓らせてゐるのです。私は彼等、この紅色陰癡人の言に依つて、この土地のヨオ（ヤオ）ニイと呼ぶことを知りました。ヨオ（ヤオ）ニイとは果してどういふ字義に當りますか。假に音譯すると、妖泥或は凹泥です。それは私に *Yoni* といふ梵語を聯想させました。蓋し當らずと雖も遠くはないでせう。いづれにしても、さういふ言語感情にふさはしい實際なんともいへぬ陰森

な濕地です。光も熱もここでは稀薄です。一日のうちの極短い時の間、それも朦朧たる太陽が中天に然えあがります。そのあとさきはただ薄明の世界です。私は婦人ではないのでなんともいひ兼ねますが、まるで twilight Sleep とでも形容したい雰圍氣です。スキタイの小羊と呼ばれてゐる根莖をもつた妖しい羊齒類に隈どられた暗い沼は、ビシブ状の軟泥に覆はれて、立昇る気滄は、人を誘ひ込まうと死の呪文を口誦んでゐます。私はともすれば滅入らうとする氣色を勵まして、携帯してきた百呎の測鉛を試に淤泥の上に抛つてみました。すると瞬く間に吸ひ込まれて、ものの一分と経たないうちに機勢のついた緊張が私の手を撥ね反す——途端、錘線は飛んで、アッといふ間に影も形もなくなつて了ひました。私はゾッとしました。どの位深いか底が知りません。それこそ現世ながらの奈落です。さうです、希代の悪をなす支那の醫し難い疾患の、正しく淵源です。恐らくこの悪汁は、大瀾漫して厖大な支那の版圖の底ひろく汚瀆を擅まましてゐることせう。

それにしてもすんでのことに、私は錘線の道連となつて、この悪業の沼の餌食になるところでした。私は姑く俯伏せになつて、心臓の鼓動を壓へてゐました。そのうちに惡氣に中つたものか堪へ難い頭痛とともに激しい痙攣が始まりました。それから先のことは溷濁して、ただ私の耳殼の癩痕組織に新らしい肉芽が増殖するやうな夢とも現ともつかない幻が、

束の間の太陽の然え上るまにまに私の腦底を掠めた朧氣な記憶があるばかりです。私が昏迷から覺めたのはそれから四日目のことです。私は土地の者の手に介抱されてゐました。醒め果ててひとり我を怪んだのは、私の耳殼が再生してゐたことです。耳が生えてゐる！夢ではありません。現實です。尤もそれは耳といふのもすさまじい限の、世にもぶてうはふなていたらくのものでした。なんのことはないスキタイの小羊をそのまま補綴したやうな怪しげな品物です。併し耳は耳に違ひありません。何しろ無氣味な話です。が、格別ほかに缺けた道具もない工合。それにこの時になつて氣づいたのは、土地の者のすべてが悉く肉體に過剰な負擔をもつてゐることです。拇の三つある男。三つの乳嘴で嬰兒に乳を含ませてゐる婦。その嬰兒のダーウィン突起が又三つです。私は寒くなりました。なんともいへませんが、この陰濕な空氣の中には一種の肉芽促進性の作用をするゲンがあるのではないでせうか。なににしてもこんな薄氣味の悪い土地に長居は無用です。で勿々私はこの地を離れようと思ひました。ところで、ひそかに私の危惧したことは、今となつては果して容易にこの魔の境から脱け出せるかどうかといふことです。さうなると氣の所爲か、いひやうのない惡寒が毛骨に擲まつてきます。剩へ肝心の足が竦むのです。最早絶體絶命です。この上はただ死力を竭して行けるところまで行きつくすばかりです。かう觀念した

私は、妖泥と都蘭寺と結ぶ直線を、濕地脱出の最捷徑と斷定して、まづ土地の者の目を晦すために、一切の所持品を、携帶口糧をさへ擲つて、こればかりは生命よりも先の磁針をたよりに、七月三十日の夜陰に乗じて、霧地脱出の途につきました。幸、私の危惧は一片の杞憂に了りました。とはいへ、執拗な惡寒と惡意ある沼澤地は、徹頭徹尾私の前進を阻んで、距離に於ては往路の半にも達せぬ行程は、逆に倍の日子を要したほどの惡竦さを極めました。かうして辛くも柴達木濕地を脱出して、豁然、都蘭寺の鎮まちに入ったのは九月も末のことでした。ここまでくると、さしも私を惱ました惡寒も、全くその跡を絶ちました。が、同時に妖泥で再生した私の耳殻は忽焉墮落して、又舊の醜い癢痕に還りました。……

昭和八年四月拾日印刷 昭和八年四月拾五日發行

著者 安西冬衛

刊行者 百田宗治

印刷者 荻谷源次郎

發行所 椎の木社 東京市中野區川添町四拾六番地

限定刊行參百部 價七拾錢

